
星の妖精物語

ティンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の妖精物語

【Nコード】

N3298X

【作者名】

ティンク

【あらすじ】

神様の部下のミスで死んだ俺は新たな相棒と共に魔法の世界へ！
原作介入ありまくりです！

プロローグ

……………あれ？

「どこどこ？」

「ここっでもしかして…天国！？」

もしかして俺…死んじゃった！？」

主人公視点

「嘘…マジで死んだのか俺…」

「はい…すみませんでした」

「うわあ！！びっくりした…あなた誰ですか？」

「私は…あなた達が神と呼んでいる存在です……………」

「嘘だ…そんなちっこいクセして…」

「あなたが話しやすいようにこの大きさになっているだけです（怒）
なんなら元の大きさに戻って差し上げましょうか……………？」

……………かなり怒っているようだ。

「すみませんっ！でもなんで俺死んだんですか？」

「私の部下が間違っただけでああなたのデータを破棄してしまったのです…すみませんでした…」

「そーゆー事ならしょうがないですよ。間違いは誰にでもあるんですから」

「あなたは心の広い方ですね…お詫びについては何ですがあなたを転生させたいと思います」

「転生…というと？」

「あなたがいた世界ではないどこかの世界に送ることです」

「へー第二の人生って訳かい」

「まあそういう事ですね。あなたが行く世界は魔法が日常に使われるファンタジーのような世界です」

「面白そうな世界ですね」

「というわけでああなたにも魔法を使えるようにしてあげましょう」

「まじ！？んじゃあ………星のカービィのコピー能力使えるようになりたい！！あ…あとワープスターとかも！！」

「………変わった方ですね…他の人はみな過負荷とか異常とかかって言ってくるのに………」

はい変わってますよ。

こういう人なんです。

「…そしてあなたのパートナーにこの生き物を……」

「ピッチュユー!」

「……………ピチュー?」

「はい…わたしがポケモンの世界から卵を取り寄せました…さつき
孵化したばかりですよ」

「ありがとうございます。よろしくなピチュー。」

「ピッチュユー!」

「容姿はどうしますか?」

「顔はこのままでいいよ。服は…よくわかんないから学校の制服で
いいや。あ、夏用ね。ワイシャツとズボンだけでいいから」

「わかりました…後あなたの身体能力を向上させてあげようと思っ
たのですが…すでにあなたの身体能力はこれから行く世界でも桁違
いに高いので大丈夫でしょう」

まあそりゃあね…ジャンプで学校の屋上にいけるし。

…なんでだろうっね?」

「じゃあ行ってらっしゃい」

ガコン

「え」

ヒュー……

床に突然穴が開いて、俺とピチユーは下に落ちていった。

まあ、がんばろうか。

登場人物紹介

リュウセイ

主人公。元の名前が流星で、本人がこの名前を気に入っていたのでカタカナで使用している。

元々身体能力がマリオ以上のため、魔法を使わずに相手の心臓をついて呼吸を止めたりもできる。

魔法

星のカービィのコピー能力。

ただし呼び名にはいくつかのルールがある。

1 被るものは2つで一つとする。

例 プラズマとスパーク

バーニングとファイア

カッターボムとニンジャ

2 カッターはファイナルカッターのかたちをしている。

3 コックはスマブラ方式。

ピチユー

リユウセイのパートナー。喋れないがそこいらの魔導師よりは普通に強く、戦いでもリユウセイをサポートする。技

でんきシヨック

でんじは

アイアンテール

てんしのキツス

でんげきは

でんこうせつか

こうそくいどう

かげぶんしん

10万ボルト

かみなり

ボルテッカー

第一話 クマー！！

ヒュー…

俺とピチューは落下中。まあ着陸出来る自信はあるんで………よっ。

ズドーン！！！！！！

「よし！！着陸成功！！」

「ピッチュ」

「さーこれからどうしようかな……てあれ？服ちがうじゃん！！つか俺背縮んでるー！！」

「ピチュツ！！」

「ん？どうしたピチュー。……手紙だ」

『リュウセイへ

あなたの年を十歳にしておきました。そのほうがやりやすいからです。身体能力は落ちてないから安心してください。

また、服ですが、あなたが16になったら贈りますので、それまではそちらで用意してください。

神様より』

「……………まあしょうがねえか。これからどうしよう……………」

そう言つてピチューの方を振り向いたら、なんと後方にクマがいたのを発見した。

「……………クマー！」

クマの鳴き声とは思えない声を出してクマは突っ込んできた。しかしリュウセイは気づいた。あの目は何かに怯えている目だと。

「……………大丈夫？なにがあつたの？話してよ」

意外にもクマはおとなしく、すぐにリュウセイになつた。そしてピチューを通して最近住み着いた化け物が仲間を殺してしまう事を知った。

「よし！倒すかその化け物を！！」

ピチューも賛成のようだ。

「君はここで待ってて」

クマはここに残るように言うと、リュウセイ達は森の奥へと入っていった。

???視点

私はレヴィー！フェアリーテイルの魔導師よ！………まだ小さいけどね…マスターからいきなり森の謎の落下物を調査してこいって言われちゃって…まあこの森は慣れてるからね。サクサクと終わらして帰って本読もつと！！

私が森の奥へ入っていくと…急になにかが迫ってきて、私は足がすくんじゃった。

その「なにか」は、徐々に私にその姿を表した。それは……
「ワイバーン……！！！」

当然ながら私にワイバーンと戦う術なんてない。
私は死を覚悟した……

ワイバーンはブレスを放ってきた。
私は目をつむった。

けど、いつまでたっても体は痛くはならなかった。

恐る恐る目を開けると、そこには1人の男の子と一匹の可愛い黄色い生き物がいた。

リュウセイ視点

間に合った……

俺が森を歩いていくとなんか怪物に女の子が襲われているところを

発見したので、急いで走った。そして口から放った衝撃波のようなものをパラソルで防いだのだ。

「……………君大丈夫？」

「あ、あなたは？」

「話は後！！」

「は……」

そこまでいうと俺は怪物に向かっていく。

後ろから危ないという声があるが、無視する。

俺は光に包まれ、姿がかわっていった。

緑色の剣士を思わせる帽子に切れ味の鋭そうな剣。

コピー能力ソードだ。

「な……………」

女の子が驚いているが無視。

俺はそのままジャンプした後…思いっきり急降下しながら剣を叩きつけた。

「ファイナルソード！」

それと同時にピチューがボルテッカーを使い怪物に突進していった。

怪物はフラフラしながら倒れてしまった。

「すごい……」

「よっしゃあー！」

「ピッチュ」

「ありがとう……君の名前は？私はレビィ。フェアリーテイルの魔導師よ」

「俺はリュウセイ。こいつは相棒のピチュー」

「ピッチュ」

「リュウセイにピチューね。私はこの森の謎の落下物を探してるんだけど……知らない？」

「……それ多分俺たちだよ」

「……え？」

上空からパラシュートなしのスカイダイビングしたもんでね、と俺は付け加えた。

「……なんで生きてるの……」

「まあ鍛えてるんでね」

「ところであなた魔法使えるの？」

「さっきのがそうだよ」

「ねえじゃあ私たちのギルドに来ない？」

「ギルドか…よくわからんがいいよ」

「決まりね じゃあ行きましょリユウセイ」

「ああ！！」

「ピッチュ」

なんかわからんけど楽しくなりそうだな、と俺は思った。

第二話 歓迎という名の手合わせ

「……あなたの魔法って剣なのかしら？」

「ちがうよ。ギルドにいたら説明するよ」

「わかった。ねえリュウセイ本好き？」

「本読むのは好きだよ」

「本当？私も本大好きなの。今度かしてあげるね」

「ありがとう。（この娘には俺のこと話してもいいかもね）」

そんな会話をしていると、なんか大きな建物のまえにでた。

「ついた！ここがフェアリーテイルよ！」

「でかい！」

「ピッチュ！」

「みんなただいま」

「おおレヴィ。謎の落下物とはなんだったのじゃ」

「この人だったそうです」

「ちーす」

「ピッチュ」

「ふーむ…お主は…」

「俺はリュウセイって言います。こっちは相棒のピッチュ」

「ピッチュッ」

「ふーむ…それでフェアリーテイルに何のようじゃ」

「この人達がフェアリーテイルに入りたいてって」

「いいぞ。お主の魔法は一体なんじゃ」

「俺？」

ふーむ。しまった。

名前考えてなかった。

じゃあ……

「ギャラクシイって言って、星の戦士の力を使います」

「ほお。でこっちのピッチュというのは」

「魔法ではありませんが、体内で電気を生成して放出する事ができます」

「そいつはすごい」

「なあ」

「？」

「勝負しようぜー」

「いいけど君の名前は？」

「ナツだ」

「ナツだね。じゃあ外に行こうか」

外

ザワザワ…………

「ギャラリーがいっぱいいるなあ」

「じゃ始めようぜ」

「ああー」

「よし、では…はじめー」

「火竜の鉄拳！」

「遅い！」

俺はナツの背後に回り込み、手刀を首にあてて気絶させた。

「おわり！」

シーン……

あれ？

みなさんどつたの？

「ウオオオオオ！！ナツをあんな簡単に倒しやがった！」

「すげー！！！」

「かなりヤバいぞあいつ！！！」

「おお、びっくりした」

「すごーい！！！！すごいねリュウセイ！！！」

「ピッチュ」

「みなの方今宵は宴じゃ！！！！歓迎パーティーじゃ！！！」

マスターのその一言で宴が始まった。

ギルド内

ただいまパーティーの真っ最中。

「なあ」

いきなり誰かに声をかけられた。

俺はレビィと話をしていた。

「なに？」

「お前強いんだな」

「君は？」

「俺はグレイ。グレイ・フルバスターだ」

「グレイだね。よろしく!!」

「おい」

「こんどは誰？」

「ようつエルザ」

「エルザ来たの？」

なぜかレビィが不機嫌だ。どうしたんだろう

「エルザ？」

「自己紹介がまだだったな。私はエルザ・スカーレットだ」

「俺はリュウセイ。よろしく！」

「ねえリュウセイ」

「ん？」

レビィがはなしかけてきた。

「なんで上空から落ちてたの？」

それはね、と俺は今までのことをレビィ、グレイ、エルザ、そしていつの間にかいたナツに話した。

第三話 初仕事

「な……」

「別世界の……」

「住人……」

「だとお！」

「YES」

「……信じられねえ」

「そんな事もあるんだな」

「まあその話はまた今度するよ。それより……」

「どうしたの？」

「なんかさっきから2人位こっちを睨みつけてくるんだけど……」

「……（あいつ新入りのクセにレビィと楽しそうにしゃがっ

て……………」

「……………（許せん……………絶対クロス……………）」

「ジェットとドロイね…全く」

「俺もう帰る……………家探さなきゃ」

「マスターに相談してみたらどうだ」

そうエルザが教えてくれたので、そうする事にした。

マスターが紹介してくれた家はなかなかいい家だったので、速攻でそこ決めた。

料金は一括で払った（どうやら神様が想定してお金を銀行に入れてくれたらしい）

さらに、寝る前に神様から念話に来て、お米やら箸やらを送ってくれた。

……………ありがとう神様。

次の日

「ちーす」

「おはようリュウセイ」

「おはよう」

「よう！」

「やあ」

「おおリュウセイ。お主フェアリーテイルの紋章をつけてなかったな。」

「紋章？」

「体につけるマークじゃよ。どこにつけるのじゃ？色も選べ」

「じゃあ色は紺色で。場所は肩のあたり」

「ピッチュ」

「……え？ピチューもつきたいの？」

「ピチュッ」

「じゃあピチューにもつけてあげてください」

そうしてリュウセイ達はギルドマークをつけてもらった。

「さて今日はお主にクエストをやってもらっ」

「クエスト？」

「仕事じゃ。あそこにある掲示板をみて仕事を選べ」

「へえ〜…色々あるな………よしこれにしよう」

俺はAA級の凶悪モンスター、リーガルの討伐と書いてある紙を掲示板から破ってマスターに見せた。

「な…お主死ぬ気か!？」

「へ？」

「これは一流の魔導師でもなかなかクリアできないレベルのものじ

やぞ……!」

「おお、そんな事言われたらもつと行きたくなってきた」

「……まあい。じゃあお主は初仕事じゃから誰かについてって
もらえ」

「ん〜じゃあ……」

「がんばろーね」

「うん」

俺が誰でもいいです、と言ったらレビイがいきなりじゃあ私が行く
ーと名乗り出てきた。
マスターは危険だと止めたがレビイがいざとなったらリュウセイが
守ってくれるなどと言い出したのでマスターもしぶしぶ了承したの
だ。

「そいで目的地までどの位かかる？」

「3日位よ」

「そんな!？」

「だってAA級だもの」

「はあ…しょうがない。あれを使うか」

「あれ？」

俺は指をくわえて口笛を吹いた。

しばらくすると空から星が近づいてきて、ちょうど俺の目の前で止
まった。

「なにこれ!?!」

「ワープスターって言うんだ。さあ乗って」

そうやって俺とピチューはワープスターに乗り込んだ。

「落ちない?」

「墜ちない墜ちない」

おちないの意味を間違えている。墜ちないだ。

「じゃあ…」

レビィもワープスターに乗り込んだ。

「じゃあ…出発進行!?!」

「ピッチュ」

ワープスターは俺達を乗せて飛びだった。

「どんぐらいかかる?」

「歩いて3日なら二十分だな」

「はや!?!」

「もっと早くできるよ。元々は宇宙を駆ける星の船だからね」

「へ、へえ〜」

そんな他愛もない話をしていると、目的地に到着した。

「ふうついた。」

「この森の中？」

「うんそうよ」

「……………！ピッチュ！」

「どうしたピチュー」

「ピッチュ！ピッチュ！チュピッ！」

「……………ますますわからない」

「もしかしたらリーガルを静電気で探そうってか」

「ピッチュ」

当たったようだ。

「よしピチュー頼む」

「ピッチュ」

「……………！チュピッ！」

「見つけた？」

「ピチュッ、チュピッ！」

ピチューは森の奥に行ってしまった。俺達もその後についていった。

「チュピッ！」

「この穴の中か」

「行きましょう」

「ああ」

「うわー中は意外と広いな」

「ピチュッ」

「あ！見つけたよ」

レビィの聲がした方を向くと、巨大な生物がこちらを向いて向かってくるのが見えた。

「よし！サクッとたおしちゃおう」

「ピッチュ」

「ピチュー、十万ボルトだ」

「ピーチュー!!!」

「コピー能力ファイア、バーニングアタック!!!」
十万ボルトとバーニングアタックはほぼ同時に命中し、リーガルはもう虫の息だ。

「とどめのコピー能力ミックス、アイス・カッター!!!ローリングカッター!!!」

俺はアイスとカッターを混ぜ、スケートのように滑りながら足についた氷の刃を回転させながらリーガルに叩きつけた。

「私こなくてもよかった気がする」

「ピッチュ」

リーガルは倒れてしばらく痙攣していたがやがて完全に息を引き取った。

「よし!リーガルを埋めて帰ろう!」

「埋める?」

「うん。リーガルだって生きてたからね。死者が出てなければ俺だっただおしてないよ」

「……………（そっか。モンスターだって生き物なんだ。大事にしないとね）」

俺達はリーガルを埋めて依頼人に報告し、お礼をもらってワイプスターでギルドに戻った。

番外編 コシヒカリの中毒性

ギルドに入ってから、俺は神様から送ってもらったご飯（米）ばかり食べている。

今回は日本の伝統食白米の素晴らしさをギルドのみんなに伝えていくギャグストーリーである。

レビィ視点

「あ！昼飯の時間だ。じゃあ一回家に帰るわ」

リュウセイはなぜかご飯をギルドでは食べない。ギルドでご飯が食べられる事は説明した。

……………なんでだろう。ギルドのご飯がおいしくなかった？いや、そもそもリュウセイは食堂でご飯を食べた所を見たことがない。リュウセイの性格から考えて食わず嫌いはしなさそうなので、私が見たこの予想は多分ハズれていると思う。

じゃあ…お金がない？

いや、それもないと思う。あまりギルド内では知られてないけどリュウセイは実はかなりお金持ち。

AA級のクエストに挑戦しまくってるから当然かもしれないけど、

実はその金のほとんどを寄付している。

そんな余裕が有るほどお金持ちなのよね。

じゃあ…食べたい物が無い？

……………それは一番ない。

フェアリーテイルの食堂はかなり品揃えはいい。この国の食べ物ほとんどそろっているし、ナツ用のファイアパスタなんてのもある。

……………あ。

そうか。

リュウセイは別世界の人だったわ。

別世界の食べ物なんて知らないもの。

……………別世界の食べ物かあ……………ちょっと気になるよね。
……………後を付けてみようかしら。ナツやエルザ、グレイも誘って。

視点なし

リュウセイの家の前に集結した三人は、リュウセイの家の扉を静かに開けた。

「おじやまします」

「いらっしやい。レヴィ、エルザ、グレイ、そしてナツ。ところで何の用？」

「いや…リュウセイご飯どうしてるのになって」

「食べるっ？」

「え？」

「俺今から食べるところだから。」

「いいのかー？」

「どーぞどーぞ」

「ふむ。ではいただきます」

「おまたせ」

そう言ってリュウセイがナツ達の前においたのは白米と味噌汁、海苔に緑茶。

……………それに箸。

「……………リュウセイ？この二本の棒はなんだ」

「箸って言うてね、こうやって使うんだよ」

リュウセイは器用に箸を操り、白米を口に運んでいる。

「……………スプーン使う？」

「……………ああ」

「……………俺も」

「……………同じく」

「……………私も」

「おいしい！！これおいしいよリュウセイ！！」

「うめえー！！」

「おうーうまいぜ」

「……………ふむ。この飲み物はなぜか体と共に心も暖まるな」

日本食は好評のようだ。

「おいガキ共。ジジイが呼んでるぞ……………ってなんだこのうまそうな匂いは……………！！！！！！」

そう言っ入ってきたのはラクサス。マスターマカロフの孫でありリュウセイの友達だ。

なぜこの2人が友達になったのかは次の番外編で明かしていく。

「やあラクサス。白米食べていく？」

「なんだ白米って」

「いいからいいから」

こうしてラクサスも日本食の虜となった。

「エルザ！勝負だ……ってあれ……なんだこのいい匂い」

「ナツー！遊ぼう………おいしそう」

「ねえちゃん待って………うまそう」

新たに来たのはミラジェーン、リサーナ、エルフマンの姉弟。

人のいいリュウセイは当然のように三人にも日本食を振る舞った。

すっかり日本食に夢中になった八人は1日ずつリュウセイの自宅で日本食を食べる事をリュウセイと約束した。

月曜日 レビイ

火曜日 ラクサス

水曜日 エルザ

木曜日 ナツ・リサーナ

金曜日 グレイ

土曜日 ミラジェーン・エルフマン

これに約六年後さらに人数が増えるのだが、当然リユウセイは知る由もなかった。

第四話 破壊の火炎百分の一

「闇ギルド？」

リュウセイは聞き慣れない言葉を聞いて首を傾げる。リサーナは続けた。

「うん、闇ギルドっていうのはね」

闇ギルド。

それは暗殺や窃盗など評議会が認めていない仕事を好んでやる、正式に認められていないギルドである。

元々正規ギルドだったものもあれば、最初から闇ギルドとして存在していたものもある。

その闇ギルドの討伐に今回リュウセイは行く事になった。

評議会の依頼で。

「……というわけで、気をつけて行ってきてね」

「あゝ」

今日はピチューは連れていかない。

というより連れて行けない。

レヴィが今日1日だけ貸して、と言って無理矢理拉致ったのだ。本人がいうには町の明かりの作業に必要なとか。

今回討伐するギルドは蜘蛛の糸、『スパイダーストリング』。

かなり力のある闇ギルドだそうだ。

だがリュウセイとしては退屈しなくていい。

「いっちょ暴れてやるか！と今頃思っているだろう。」

本人としては簡単に想像できるあたり否定できないらしい。

「じゃ行ってきまーす」

リュウセイはワープスターで目的地に向けて飛んでいった。

目的地の近くにつくとリュウセイはワープスターから降り、近くの建物に近づいた。

スパイダーストリングは森の中なので暴れても大丈夫、とリュウセイは豪語していた。

「ちーす」

リュウセイはそう言うのとドアをバン、とけり抜いた。
途端に周りからの視線がリュウセイに降り注ぐ。

「正規ギルドの者です。あなたたちをつぶしてこいとのことです
であなたたちを今から O S H I K I します」

リュウセイは一度言ってみたかったこのセリフを言ったが、むしろ
怒らせてしまったようで闇ギルドの魔導師が襲いかかってきた。

「なめんじゃねえぞツンツン頭!!」

「ツンツン頭……………?」

後日談。

ありや悪魔だ!

(謀ギルドの Aさん)

殺されるう!

(おなじく Bさん)

ちなみにリュウセイは髪の毛がツンツンしていて、
それを言われるのを一番気にしていた。

「コピー能力クラッシュ……………」

「破壊の火炎百分の一いいいいいい！！！！！！」(怒)

結果。

スパイダーストリング壊滅するも、周りの森125Haも砂漠化。

それはリュウセイが初めて起こした問題であり、この問題を機にリュウセイは次々と土地破壊問題を起こすこととなる。

彼は後に

「星の妖精」

「星屑の妖精」

などと呼ばれるが、さらにもう一つ

「土地の破壊者」

と呼ばれる事になる。

第五話 規格外少女大暴走

ある日の事。

神様からいきなりテレパシーがきた。

その内容は……

他の漫画のキャラがこっちに来るかもしれない、というものであった。

原因は、部下のミスらしい。多いね。

その漫画は……

そこまではわからないらしい。

でも世界に歪みが生じるのでなるべく早く知り合えとのこと。

……知り合うだけで歪みは解消されるのか？とも思ったが、それ以上理由を聞くのも無駄だと思い、そのキャラを探しにいく事にした。

マグノリアの街

街を歩いていると、なにやら見覚えのある目の死んだ（というより無気力？）少女にいきなり声をかけられた。

「ちょっとお訪ねしたい」

「どうしました」

「ここはどこだ」

ピンクがかった白髪の少女は聞いた。

「ここはマグノリアだよ」（あれ、どっかで見たような）

「ふむ……ハレたちはどうしたのか……まあいい、」
「ん？今ハレって言った？」

「あの……君の名前は？」

一応確認のため聞いてみる

「人に名前を訪ねる時は自分から名乗るのが礼儀だろう」

「じゅめん、俺はリュウセイ」

そうやって俺は少女の返答をまつ。
少女の口からは予想通りの言葉が出た。

「私はグウだ」

(やっぱこいつグウだ~~~~~!!!!!!)

グウ。ジャングルはいつもハレのちグウに出てくるヒロイン?である。

ちなみに、人ではない。

彼女の体内に人が暮らせる空間があり(原作終了時点では体内人口0)

自由に体のサイズ変更可能、伸縮自在、さらには年齢変更まで可能だ。

そんな人がいてたまるか。

さらに、性格に難あり。

彼女はみたまんま『規格外少女』である。

しかもかなりたちが悪い。

元は優しいのだが。

さてそんな彼女ですが行く宛がないというのでフェアリーテイルに連れて行く事にした。

正直不安はあるけど。

「ただいま」

「おかえりリュウセイ。その女の子は？」

「フェアリーテイルに入りたいて」

「わかった。マスター連れてくる」

すこしするとレヴィはマスターを連れて戻ってきた。

「その子がフェアリーテイルに入りたいというのは」

「……………グウだ。よろしくハゲ親父」

「……………！！マスターになんて事を言うんだ！！」

エルザが怒り出した。

「いやよく言われるから気にしてないし」

「む、言い方が悪かったか？では言い方を変えよう。グウっす ヨ

□ ハゲ親父」

「……………表に出ろ！！その腐った性根叩き直してやる……………！！」

「ほお……………このグウ様にたてつく気が……………面白い……………受けて立ってやる、グウに勝負を挑んだ事を後悔するがいい」

(あー……エルザ終わったな)

エルザはグウの事を睨んでいる、グウはわからないだって目が無気力だから。

ギャラリーもたくさんだ。

ちなみに俺は審判。

ギャラリーはグウの格好にざわめいている。

グウはクマの着ぐるみを着ていた。(どっから取り出した?)

「貴様舐めているのか？」

「いやいやグウはいたって真剣ですよ」「キラ」

なんかグウを見てるとシリアスなムードが一気に崩れていくな。

よし、じゃあ……

「始め」

「天輪、循環の剣(てんりん、サークルソード)!!」

エルザは先手必勝とばかりにいきなり大技を繰り出す。

「……………」(カパッ)
「？」

グウは口を開けた。

ギユバアアアアアア！

次の瞬間グウはまるで機械のような表情になり口から極太のビームを発射(エルザの身長4倍位はゆうにある)した。

そのビームは剣諸共エルザに命中し…

エルザは鎧を破壊され倒れていた。

「はい終了、勝者グウ」

「つかエルザやばい。

はやく治療しないと、

とみんなが言っている、

が

「グウにお任せあれ」

「治療もできるのか？」

「一応俺もラブラブステッキを使えば回復できるが面倒なうえに恥ずかしいのでグウに任すことにした」

「ええ、このちんちくりんステッキで一振りですよ」

そう言っつてグウは釘バットで素振りを始めた。

(……………あれはちょっと)

「グウ待って」

「古今東西」

バキ

グウがエルザを釘バットで殴ると、みるみる傷が癒えていく。

「おお」

「すげー」

「うん…私は一体、っていったああああ!!」

「」「」「え?」「」「」

「あ、それ傷は治るけど殴った痛みは残るのであしからず」

「先に言え!!!」

「いや〜失敗失敗」(テヘ)

俺は正直言ってこいつをフェアリーテイルに入れていいのか不安になった。

番外編リアル鬼ごっこ / 雷と流星(前書き)

二本立て。

番外編リアル鬼ごっこ / 雷と流星

番外編1 リアル鬼ごっこ

結局グウは女子寮に入る事になり、しばらくはなにも問題を起こさず

にいた。

そんなある日

「鬼ごっこしよう！リユウセイ、グウ」

リサーナが急にそうやってきた。まあ魔導師といってもまだ子供だからな。体を動かして遊びたい時もあるだろう。

俺とグウは二つ返事でオーケーした。

ちなみにメンバーは

リサーナ

レビィ

ナツ

グレイ

エルザ

カナ

俺

グウ

だった。

「……………じゃーんけーんぽん!」……………

「グウが鬼ね」

「逃げるー!!」

俺達はギルドから出て行く。

「きゃ、逃げ遅れちゃった」

あ、レビィ捕まるなあれじゃ。

俺が曲がり角を曲がったところで事件は起こった。

「え、ちょ……………グウちゃん?キヤアアアアアアアアア!」

「!?!」

俺はレビィの悲鳴を聞くと来た道に戻った。

そこには、鬼がいた。

「えーと、グウ？……………レビイは？」

だがグウは質問には答えず、ただこう言った。

「鬼は鬼らしく……………人を喰らってこそ……………？」

……………やべえ。

喰われるー！！

「逃げろー！！」

俺はコピー能力ジェットを使い必死でにげた。

「あれ？今のリュウセイか……………ってぐわああああー！！！！」

「！？今度はグレイかー！！」

「キャアアアアアアアアア」

リサーナ……………

「ぐわああああ」

エルザ……………

「ひひひひひひひひひひ」

カナ……………

「ぎゃああああああ」

ナツ……………

「ぐわああああ」

「助けてええええええ」

「鬼があああああああああああああああ」

あれ？他の人も巻き込んで……………

やばい！！

このままじゃ街の人みんな喰われる！！

俺は最後の悲鳴が聞こえた場所にいった。

街の中心部

「グウ？……………街の人達は？」

俺は怖くなったが、勇気を振り絞って言った。

「……………もうおなかいっぱい」

ぎゃああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

「あ、でももう一人位入るかな」

「え」

バクン

……………そこで俺の意識はなくなった。

そして誰もいなくなったー………。

おしまい

注 今回で『星の妖精物語』は終わりです。

ティンク先生の次回作にご期待ください

.....。

「勝手に終わらすな作者あああああ！！」

「きゃっ」

……………へ？

「あれ、ここは……………」

そこはギルドの中だった。

「大丈夫リュウセイ？あなたすごくうなされてたのよ」

あれ？

俺は確かグウに飲まれて……………

あ、

なーんだ、夢かあ。

「ところでなんでコピー能力のままに寝てたの？」

そーかそーか夢か……………ってえ？

俺はジェットのコピー能力をしていた事に気づいた。
そしてグウの方を見る。

すると……

「……………げふ」

……………これは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だ
ああ……！

続く……………のか？

ズドン！！！！！！

その瞬間ギルドメンバーは全員気絶してしまいましたとさ（グウの気当たりで）

リュウセイ視点

なぜ俺がラクサスと友達なのか？

討伐の件で俺無双

新聞にのる

ラクサス目をつける

喧嘩

俺圧勝

子分にしろ発言

友達じゃだめか？

友達に

てことです。

「今回の依頼は？」

「カトラの砂漠でモンスター退治」

「お楽しみ」

「……………ところでリュウセイ」

「なに？」

「なんか後ろから規格外がすごいスピードで追ってきてるんだが」

びゅーおおおおおおお……………。

「……………気にしたら君も『インザワールド』の餌食になるからやめた方がいいよ」

「……………ああ」

インザワールド。

グウの魔法？の一つ（もともと個人的な能力なので魔力消費0だが）

グウは魔法がないから

リュウセイが名前をつけ、魔法とした。

名前の由来は

なんか段々グウの世界に引きずり込まれている気がするから。(リ
ユウセイが)

ちなみにグウによって記憶操作されていてグウの恐ろしさを知って
いるのは

リュウセイ

レビィ

エルザ

マカロフ

そして今なんか知ったラクサスだけ(現時点では)

どうやらグウはあきらめたらしく追ってこなくなった。

俺達はそれ以来一緒に仕事に行こうとすると必ずグウが追ってくる
ようになってしまった。

番外編リアル鬼ごっこノ 雷と流星（後書き）

こんにちは！！

リュ「ちわー」

グウ「よう」

これからこのあとがきを利用して相談室を始めます！

リュ「いえー」（棒読み）

グウ「いえー」（同じく棒読み）

内容はこの小説への希望、質問、出したいキャラクターなんでもかまいません！！

リュ「ただど作者はあまりアニメに詳しくないから全ての希望が通るわけではないと言っことを理解しておいてくれ」

では次回

「ピチュー覚醒」

お楽しみに！！

第六話 ピチュー覚醒1

「ピチューピ……」

「せーので……………」

「ドーン…！（ピチュー…！）」

今俺とピチューはモンスター討伐クエストの真っ最中。

合体技「せーのでドン…！」で二十匹は倒したと思うが、なにぶん数が多いため思いのほか時間がかかり、俺もピチューもイライラしていた。

「チツ、時間かかるな……………コピー能力ニンジャ…！秘伝『乱れ花吹雪』…！…」

「チュー！（ほうでん）」

俺が放った花びらとピチューが放った電撃が重なりあって攻撃範囲を広げ、モンスターの集団に飛び込んでいく。

ドカアアアアン…！と景気の良い音がしてモンスターが吹き飛ば

「こいつでしまいだ！コピー能力スパーク…！『プラズマ……………」

「ピー…」（10万……………）」

「……はどつだん!!」

「チュー!!」(ボルト!!!!!!!!!!)

「やりすぎたー……」

「ピチュ」

俺とピチューが放った電撃によって黒こげになったモンスターの後ろには、荒野と化した森だったところが見えた。

やりすぎた、だが反省はしていない!!(キリッ)

「はあ…また始末書か」

「……ピチュ」

「いやピチューは悪くないよ、ただ俺が出力を間違えちゃっただけだから」

そう言って俺はピチューの頭を撫でてやった。

「ピッチュ」

「じゃ帰るか……ふああ帰ったら寝よ」

「ピチュ」

次の日、俺とピチューは家の地下室にいた。

ある『船』を点検するためだ。

神様が送ってくれた船とは、

天かける船『ローア』
である。

置くところがない、
と言ったら神様が俺の家に地下室（もはや地下基地）を作り上げたのでそこにしまうことになったのだ。

ちなみに船の設備は豪華で、コピー能力に慣れるための能力別のタイムアタック部屋や、エアライドマシン部屋（ワープスターなどはここから出てくる）に普通に暮らせる設備もあるし、ホログラムで敵がでてくる修行部屋、重力を設定できる訓練室がある。

ローアの戦闘力からみても噂のクリスティーナより断然高いだろう。

さらにローアは元々宇宙船なので、もちろん宇宙を飛ぶ事ができる。

実際俺とピチューは星の加護を受けているため（神様が受けさせた）生身のまま宇宙に出ても、つまりエアライドマシンやスターシップでも宇宙に出れるが、生活用の設備までついていることを考えるとローアが手にはいったのはうれしかった。

「しかし腹減ったな…」

ちょうどお昼時なので船のキッチンを使って昼飯を作ることにした。

「ピチュー、昼飯作るから適当にブラブラしてて」

視点なし

「ピッチュ」

その後ピッチュが暇つぶしの為ある扉に入っていた。

その扉は……

「格闘王への道」

第六話 ピチユー覚醒1（後書き）

「グウとー」

「レビィのー」

「お便りラジオー!!!」

グウ「いえー」（棒読み）

レビィ「と、いききたいところですが…」

グウ「どうした？」

レビィ「まだお便り一つも来てないんですよ…」

グウ「この小説の人気のなさがかがえるな」

ティンク「面目ない…」

グウ「とゆーわけでまた今度」

「「じゃーねー」」

第六話 ピチユー覚醒2（前書き）

今回短いです。

第六話 ピチュー覚醒2

ピー…ガシャン

「ピー?」

『BOSS…ザンキブル』

ピチューは驚いた。どうやら扉を間違えたようだ。しかしピチューは、ある意味チャンスだと思った。

最近のピチューは、リュウセイの役にたてないと悩んでいたのだ。

「…………ピチュ」

ピチューは軽く電気を漏らしながら最初のボス…………ザンキブルに向かっていった。

『BOSS、キングストウ』

『BOSS、ウィスピーウッズ』

『BOSS、ロロロ&ラララ』

『BOSS、ダイナブレイド』

ピチューは驚異的な速さでプログラムたちをなぎ倒していく。しかし時間がたつにつれ、倒すペースが少しずつ少しずつ落ちてい

ピチューは無理矢理電撃を放ち、ブラックホールから脱出する。

するとすぐに矢が飛んでくる。ピチューはジャンプしてかわすが、それもマルクの計算のうちだったようで、ピチューが無防備になったその瞬間を狙って氷の玉を放った。

ピキッ…

「ピチュ…」

氷の玉はピチューに命中し、ピチューは倒れる。

「クケケケ…」

マルクは不気味に笑う。ピチューにあるのは、恐怖だけだった。

実際は「格闘王の道」で死ぬことはないのだが、それでもピチューは怖かった。

しかしこれじゃだめだという気持ちもあった。

そしてしばらく沈黙した後…

「…ピチュ」

ピチューは立ち上がった。その目はなにかを決意したような目だった。

そしてピチューは指先に電気をためて…放出した。

第六話 ピチユー覚醒2（後書き）

ピチユーは超ライジングサンダーを覚えた。

人物紹介2（7年後）

リュウセイ（村山流星）

星の戦士の力を持つ転生者。13歳の時に正式に星の戦士になる。顔はいいほうで頭は普通。星の加護を受けているため火や氷は効かないうえ、宇宙空間でも（つまり酸素がなくても）活動できる。

現在16歳。

恋愛に鈍感。

服装

転生前の中学の制服。

髪型

ツンツン頭（ポケスぺのゴールド君を想像していただければOKです）

性格・特技

基本面倒くさがり屋だが、正義感は強い（本人は偽善だと思っている）

転生前夏休み中無人島で遭難した経験をもち、身体能力は人をこえていて、サバイバル能力が高い。

参考

50M走 3秒2

能力pick up（技の一部）

ファイア

ひだるまぢごく

ひだるましょつりゅう

アイス

こちこちブリザード

こちこちタックル

ビーム

レボリユーションビーム

はどうビーム

マジック

マジックルーレット

スパーク

サンダーボルト

プラズマはどうだん

ハイジャンプ

ロケットフォール

ダッシュグライダー（オリ）

など。

ピチュー

リュウセイの相棒。レビィやミラには「ピッちゃん」と呼ばれている。

技を出すときは心で声で技名をさげぶ。

技は前の紹介の+超ライジングサンダー。

ライジングサンダーは、リュウセイのドラゴストームと同じくらいの威力。

リュウセイにつくってもらったハーモニカでの演奏が趣味で、味方の身体能力をあげたり動物やモンスターの指揮をとることもできる。

合体技

「せーのでドンー!」

ピチューがパワーをリュウセイに送り込み、リュウセイがはどうを放つわざ。

リュウセイがピチューにパワーを送る場合は、雷が連続で落ちる技にかわる。

リュウセイがピチューをおんぶする必要がある。

人物紹介2 (7年後) (後書き)

次回から原作開始です!!

(リュウセイが星の戦士になるエピソードは後に過去編としてやります)

第七話 原作開始！！

はいりリュウセイです。今俺はナツ、ハッピー達とハルジオンに来てます。

結論から言うと、S級魔導師になりました。

さらにさらに！正式に星の戦士になりました！！

イエーイ！！

ハルジオンに来た理由は、ナツが火竜サラマンダーがこのまちにいるという噂を聞いて、火竜つつたらイグニール（ナツを育ててくれた竜らしい）しかいねえだろということ came ました。
俺はただ単に面白そうだったからついてきました。

「あーここがハルジオンか」

「ピッチュ」

「……………あれ？ナツは？」

疑問を漏らしたのはハッピー。ナツの相棒で、しゃべる青猫だ。しかし、機械仕掛けではない。魔法は翼テラで、翼を生やして空を飛ぶ事が出来る。

魔法といえば、俺の銀河ギャラクシイだが、どうやら魔法じゃないようだ。（マスター達には魔法とされている）どうやら俺の星の戦士の力は天然モノで、従来の星の力より威力が上昇しているようだ。

話を戻そう。

列車に置き去りにされたナツは、

「たーすーけーてー……………」

ただでさえ苦手な列車に二回乗る羽目になってしまったとき。

次回をお楽しみにね

「もう!? 始まったばかりだよ!？」

ハッピー。地の文に突っ込むな。

ルーシー視点

「このまち魔法屋一つしかないの?」

私はルーシー!!

今ハルジオンの魔法屋に来てるんだけど……

「あ!! ホワイトドギー!! これ欲しかったのよね」

「全然強力じゃないよ?」

「いーのいーの。これおいくらっ。」

「20000」だよ

え!!高い……

こつなつたら!!

「ホントはおいくら?素敵なオジサマ」

お色気作戦よ!!

結局10000しかまけてくれなかった……

「私のお色気は10000か!!!!!!」

キヤーキヤー

「なにかしら？」

「この町に有名な魔導師が来てるらしいわよー」

サラマンダー
「火竜様よー」

サラマンダー
火竜？どんな人なのかしら…少し気になるわね…

「ちょっと行ってみよう」

私はサラマンダーを見に行くことにした。

リュウセイ視点

俺とピチュー、ナツにハッピーはハルジオンの町をブラブラとさまよっていた。

「ハッピー見つからねえなイグニール」

「あい」

そもそも街中にドラゴンなんかいないよ、と思ったが、世の中になにかがあるかわからない。いるかもしれない。街中に。ドラゴン。だから俺は黙っていた。

もうしばらく歩くと、前方になにやら人だかりができていたのが見えた。

「「キヤーサラマンダー様」

「「「「「！！」」」」」

「噂をすればってやつだな！！行くぞハッピー！！」

「あい！！」

「え…ちょっと待ってよナツ」

「ピッチュ」

え…マジ…？

ルーシー視点

「サラムンダー様」

「こっち向いて」

「なに？なんなのこのドキドキは…どじじちゃったのよ私」

「ははは、参ったなこれは」

チヲ

「(はうー!-)」

「(なんで？有名だからこんなにドキドキするの?)」

「イグニール!-!」

「ちょっと待ってナツ!-!-!-!」

「(これってもしかして……………!)」

「イグニール!-!-!」

「はっ!-!-!」

リュウセイ視点

俺たちが駆け寄ると、そこには一人の男が女性達に囲まれているところだった。サラマンダーと呼ばれているのはその男の事だろう。人違いか…

「……………」

男とナツがにらみ合っている。

「誰だ、お前……………」

「サラマンダー火竜といえはわかってもらえるかな？」

「……………はあ」

「人違いだったね」

「お前の父ちゃん見てみたかったけどな」

「ピチュ」

「はやー!」

「ちょっとーあんたら失礼じゃない?」

「サラマシ火竜様はすごい魔導師なのよー」

「謝りなさいよー!」

「めんどくさいからヤダ」

「まあまあ。彼らだって悪気があったわけじゃないんだから」

「「「やさしー」」」

ポン キュッ

キュッ

キュッ

「僕のサインだ、友達に自慢するといひ」

そう言っつて男は色紙をわたしてきた。

だが正直言っつて………

「「いらん」」

「あい」

「ピチユ」

「ちょ、いっつらマジっぴくない?」

「どっか言っつてよ!」

そう言っつて女性達は石を投げてきた。

「ちょ」

「いたい」

「ピツチュ」

「アウチ!」

「ははは、すまないねレディー達。僕はこれで失礼させてもらっつよ、そのかわり今日船でパーティーをやるんだ、是非来てくれたまえ」

「「「もちろんですう」」」

そう言っつと男はどこかへ行っつてしまった。

第八話 火竜VS紅天

ガツガツ……………
ムシャムシャ……………

「ナツにハッピーだっけ？もう少しゆっくり食べても…なんか飛んできてるし」

あの後俺たちはルーシイという女の子とレストランに来ていた。助けてくれたお礼をしたいそうさだ。

あの男が使っていた魅了チャームは異性の心を術者に引きつける魔法だが、少し前に禁止になったはずだ。

ルーシイは俺たちが乱入したおかげでたまたま魅了チャームがとけたらしい。ちなみにルーシイは魔導師で、フェアリーテイルに入りたいうさだ。

「そついえばあんた達誰か探していたの？」

「ああ。イグニールってやつだ」

「人違いだったな」

「残念」

「ピツチュ」

ちなみに俺とピチューは自分の金で昼飯を食べている。女の子におごらせる訳にはいかないからな。

「見た目が竜って人間としてどうなのよ………」

ルーシイが呆れている。普通はそう思うよな。

「うんにゃ人間じゃねえぜ。イグニールは本物のドラゴンだ」

「はあ!?!」

うん。普通驚くよな。

「さっきから思ってたんだが……普通街中にドラゴンいるか?」

「!?!」

いま気付いたのかよ。

「はは。じゃあ私そろそろ行くけどゆっくり食べてね」

「ありがとうルーシィ」

「「御馳走様でしたっ!!」「「ピチュッ!!」

ナツとハッピーとピチューは土下座した……っってお前もかピチュ
ィ。

「い、いいのよ助けてもらったし」

「あんまり助けたつもりがないところが……」

「あい、歯がゆいです」

「あ! そうだこれやるよ」

ナツがルーシィに差し出したのは火竜のサインだった……って持っ
てたのかよお前!

っ! かそれだと押し付けているようにしか見えないぜナツ……。

「いらんわっ！！」

まあ、当然だよな。

ルーシイ視点

私は今公園のベンチで週刊ソーサリーを読んでいます。

「まあた妖精の尻尾フェアリーテイルが問題起こしたの？……………デボン盗賊一家壊滅するも民家七軒も壊滅……………やりすぎ！！……………あ！グラビア、ミラジェーンなんだ。妖精の尻尾看板娘ミラジェーンも滅茶苦茶やったりするのかしら……………あつ、やっぱり妖精の尻尾フェアリーテイルといったらこの人よね」

ここらへん一番人気の星の妖精スターフェアリー！！

なになに？

「星の妖精^{スターフェアリー}。三年ほど前から聖十大魔導の誘いを受けているが未だに断り続けている……ふむふむ。その实力は、大陸一とも言われる……やっぱり妖精の尻尾^{フェアリーテイル}最高にかっこいいなあ!!」

「へえ……君妖精の尻尾^{フェアリーテイル}に入りたいんだ」

後ろから出てきたのは…

「さ、^{サラマンダー}火竜!!」

「いやあ探したよ……君のように美しい女性を是非僕の船上パーティーに招待したくてね」

「はあ!? 言つとくけど私に魅了^{チャーム}は効かないわよ!! 魅了^{チャーム}の弱点は『理解』^{理解}。それを知ってる人にはその魔法は効かない!!」

「やっぱりね目があつたと勝手に魔導師だと思つたよ……いいんだ僕のパーティーにさえ来てくれれば」

「誰があんたみたいないえげつない男のパーティーになんて行くもんですか!!」

「えげつない? 僕が?」

「魅了^{チャーム}よ、そこまでして騒がれたい訳?」

「あんなの只のセレモニーじゃないか? 僕はパーティーの前はセレブな気分でいただけさ」

「あんた馬鹿ね」

私は公園を出ようとした。

「君妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたいんだろ？」

私はピタッととまり火竜サラマンダーの方を向いた。

「妖精の尻尾フェアリーテイルの火竜サラマンダーって聞いた事ない？」

ある。

「あんた妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導師だったの!？」

「そうだよ。なんだったらマスターに話通してあげてもいいよ」

「素敵なパーティーになりそうね」

「わかりやすい性格してるね君………」

「ほ、本当にあたし妖精の尻尾フェアリーテイルに入れるの!？」

「魅了チャームの事は黙っておいてね？」

「はいはい」

そういつて火竜サラマンダーは去っていった。

「やった。あたし妖精の尻尾フェアリーテイルに入れるんだ!………それまであの男には愛想よくしとかないとね」

リュウセイ視点

飯を食べた俺たちは街をさまよっていた。

「腹一杯」

「あい」

「およ？あの船は火竜サラマンダーが言った船上パーティーの船か？」

「船きもちわるっ」

「おい大丈夫か？ったくルフィみたいな奴だな」

「ルフィって誰？リュウセイ」

「ああこっちの話」

「見て見て〜あの船よ火竜サラマンダー様の船！！あ〜ん私もパーティー行き
かったな」

「火竜サラマンダー様ってあの有名な妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師なんだって！！」

「！！！」

「ちっ。そういう事か！！！！」

「ピツチュ」

「ああ。ー行くぞナツ、ハッピー！！！」

ルーシー視点

ワイワイ

ガヤガヤ

「ルーシイかい名前だね」

「どうも」

「まずはワインで乾杯といこうか」

「……………他の女の子ほっといていいの？」

「今は君と飲みたい気分なんだよねえ」

サラマンダー
火竜が指をパチンと鳴らすとワインの中身が水滴となって空中に浮く。

「目を閉じて口を開けてごらんゆっくりと果実の宝石が入っていくよ」

「うぎっ！…！」

でもここはガマンガマン……………

はっ！…！」

ばちん！…！」

「これほっ！…！」

あたしのワインの中身は……

「睡眠薬。よね」

「ほーよくわかったね」

サラマントー
火竜は不適に笑った。

「勘違いしないで？あたし妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたいけどあなたの女になる気はないのよ」

「しょうがないなあおとなしく眠っておけばイタイ目みずにするだの」

「ど、どういっ」

ゾロゾロ

いきなり大勢の男たちが部屋に入ってきた。

「ようこそ我が奴隷船へ。ボスコにつくまではおとなしくしていてもらっよ」

「ボスコって妖精の尻尾フェアリーテイルは？！」

「言ったらろっ奴隷船って。最初から商品にするつもりで連れ込んだんだ。あきらめな」

そんな……

「サラマンダー火竜さんも考えたな、チャーム魅了にかかっている女どもは自らケツふつて商品になる」

「その姉ちゃんは魅了チャームが効かないようだし、調教が必要だな」

これが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師……………？

「ふーん星霊の鍵か…僕には必要ないな」

最低の魔導師じゃない！！

ドカアアアン！！

バキッ

ドーン！！

「！！！」

「昼間のガキ！？」

「ナツ！！！」

「うぶっダメだ気持ちわりい」

「かつこわる！！！」

「なんでガキが空から振ってくるんだ？しかも酔ってるし……………」

「ルーシィこんなところでなにしてんの」

「ハッピー！！あたし騙されたのよ！！……あんた羽根なんてあつたっけ？」

「こまかい話は後」

「逃がすな！！」

「逃げるよ」

「あちよ、ナツはどつするのっ」

「二人は無理です」

「あさま……」

よし！！ハッピー脱出したな

「新スーパーコピー能力……………オメガスロウ！！！」
俺は船を……………

「せーの」

つかんで、

まっすぐ、

「でりゃあ！！！」

投げしてみる！！

「リュウセイルーシイいたよ」

「あんた魔導師だったの！？」

「言っでなかったっけ？あ。この鍵ルーシイのдарろ？落ちてたよ」

「あゝありがとうー。」

「いくぞハッピー」

「あい」

俺はワイプスター、ハッピーは翼キアラで岸に向かって飛んだ。

「よしついた」

「大丈夫かナツ」

「おお……ゆれてねえ!!!」

「おい!!!人の船に乗ってきちやいかんだろ」

「つまみ出せ!!!」

「ちょリュウセイ、大丈夫なのナツ」

「あー……大丈夫ナツも魔導師だから」

「うそ!!!」

「……俺は妖精の尻尾フェアリーテイルのナツだ!!!おめえなんかみたことねえ!!!」

「なに!!!」

「ナツが妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導師!?!」

「ちなみに俺も」

「リュウセイも!?!」

「あの紋章間違いないっすよボラさん」

「その名前で呼ぶな!?!」

「おめえが善人だろうが悪党だろうが妖精の尻尾フェアリーテイルを語ることだけは許せねえ」

「同感。俺もすこしキレちゃったな」

「うるせえこのガキ共!?!?!?!」

そういうとボラは炎の魔法を放った。

ポオオオ

「ナツ!?!」

「……………お前本当に火の魔導師か?こんなまずい炎初めて食ったぞ」

「は!?!?」

「火を……………」

「食った!?!」

「ぶつ!?!っそさん」

「ナツに火は効かないぜ。まあ俺にも効かないけど」

「食ったら力湧いてきた！！！！！！」

ナツは火を吹く構えをとる。

「ボラさん俺こいつみたことあんぞ！！間違いねえ……こいつが本物の……」

ポオオオン！！

「……………サラマnder火竜……………」

「こつちのガキをやれ！！」

「オオオ！！」

「こいつならいけるぞ！！」

「ちよーと本気だそうかなあ」

「危ない！！」

「大丈夫だよ」

「ピッチュ」

「スーパー能力……ウルトラソード!!」

俺は剣を巨大化させ、敵の集団をなぎはらった。

「グワア!!」

「て、てめえ何者だ!!」

「スターフェアリ
星の妖精です」

「ま、まさか大陸一と言われる……!?!」

「すごい……」

「そーですヨップル!!」

「ぎゃあ!!」

「くそお!!」

あゝボラが突っ込んできたな。じゃあしまいに……

「ふん!!とう!!てい!!やあ!!はあ!!」

俺はボラを巨大化させた剣で斬っていく。

「ウルトラ……」

最後に剣を巨大化の五倍くらいの大きさにして……

斬った。

「……」

やりすぎました。

港を半壊させました。

すみません。

「くっ！！逃げるぞ！ルーシイも」

「えっちょ…なんで」

「えっいやだつて来るんだろ妖精の尻尾に」
フェアリーテイル

「……………うん…！」

スーパー能力・マシン・武器紹介

ウルトラソード

持つてる剣を巨大化させて相手を斬る。リュウセイお気に入り
の能力。

巨大化させた剣で斬りまくり、最後はさらに巨大化させて斬る「ウルトララッシュ」と言う技がある。（名前はオリジナル）
火山をまつたつにした事がある。

ドラゴストーム

火の龍を呼び出し、相手にぶつけて攻撃する。

呼び出した龍をナツが食べることで……（まだ秘密だよ）ピチュ
ーの超ライジングサンダーと同じ位の威力。湖の水を全部蒸発させ
た事がある。

ミラクルビーム

光の弾を操り攻撃。速さ・方向自由自在。じつはある場所にミラク
ルビームを必要とする仕掛けがある。

あまり戦闘にはむかず、なにかを破壊する時や、とどめをさす時
によく使われる。

スノーボウル

自らの体に雪をまとい巨大な雪玉になり突進する。雪のあるところで使ったり、何かを巻き込んだりするとどんどん巨大になる。じつはジャンプも出来る。昔火山の噴火を止める時に大活躍した。

ギカトンハンマー

持つてるハンマーを巨大化させ、地面に思いっきりたたきつける技。地面にハンマーを叩きつけた時に出る衝撃波でも攻撃できる。まだ本気で使った事がない。（地震とか起きそうだから）

オメガスロウ（オリ）

作者のオリジナル。星形のエネルギーギアやとてつもなく大きなもの（船とか）を投げつける。奴隷船を岸までもどした。

???? (オリ)

リュウセイ最強の能力。
星にちなんだ能力であるが、まだ秘密である。

リュウセイの乗り物達

エアライドマシン

基本の乗り物。リュウセイがよく乗るワープスターもこの種類になる。

ゲームとは違い空を飛ぶ事も可能(一部のぞく)種類によって性能が違う。

ウィリーバイク

リュウセイが「ホイール」を使うとこれが出てくる。水面を走ったりジャンプする事も出来る。

アイス、ファイア、スパークのみミックス可能。
ちなみに喋る。

ドラグーン

伝説のエアライドマシン。そのスピードは異常に高く、飛行能力に優れ、それらの特徴を活かした突進攻撃が得意。

スターシップ

撃墜されたワープスターにミルキーロードの光が集って登場。以来、発動可能に。スターショットやスターバースト、スパイラルシップ

などが使える。

天かける船ローア

リュウセイとピチューの拠点。説明は第六話『ピチュー覚醒』を参照。

戦艦ハルバード

出るかも。

出るとしたら星の戦士物語で。

リュウセイの特別な武器

虹の剣

リュウセイの空中戦に欠かせない武器。剣を振る事で衝撃波を出せるように。

虹の剣を持つだけで飛べる。

ラブラブステッキ

リュウセイの数少ない治癒能力。しかしあまり使わない（恥ずかしいから）

クリスタル

リュウセイの空中戦に欠かせない武器。虹の剣とは違い完全なシューティングゲームのような感じになる。虹の剣と同じく持つだけで空を飛べる。

トリプルスター

別名三連星。

3つの星を飛ばして攻撃。3つの星は攻撃しない時常にリュウセイの周りを回り続け、相手からの攻撃をガードする。

最近練習して1つを防御にまわし残りの2つで攻撃したりできるように。

三ツ星の杖は背負っている状態でも防御はしてくれる。

スーパー能力・マシン・武器紹介（後書き）

ハルバードのところへ出た『星の戦士物語』ですが、これは外伝みたいなものにしてしまうとと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3298x/>

星の妖精物語

2011年11月18日04時53分発行